

佛教の思想性と教養

佐藤 密雄
(本校教授)

佛教は道理へ還元してすべてのものを考へ様とする所に、其の根本的な思想性格がある。

オルデンベルヒが指摘した様に、ギリシアでソクラテスが、ユダヤでイエスが、然して古くインドで釋迦が人間精神の確立をなした。これは單なる思想改革ではなく、人類が、自然に畏怖し自然に服従して居た状態から出でて、人間精神に依つて自然を處理して、人間的文化を創造して行くに至らしめた轉回である。十六世紀のルネッサンスよりも、異つた更に大きな意義に於いて見られねばならない「原始ルネッサンス」である。

此の人間精神の發見と確立に於いて、ギリシアの人々は「知ること」に、ユダヤに人々は「信ずることに」人間精神の依るべき最後のものを見出し、哲學と宗教を成立し、其の中から人間文化を生み出さんとした。然し、印度の人々は知らずに信ずることも、信ぜずして知ることも出来なかつたために、こゝに佛教の如き思想を生み、人間生活を秩序づけて行つたのである。ギリシアの哲學とキリストの宗教をば、哲學と宗教を呼ぶならば、佛教は宗教でも哲學でもなく、宗教的で哲學的な思想性格のものと言へやう。

然し、かゝる性格のものが生れたことは、かつて印度の概念の仕方が、その様なものだつたからである。「知る」と言ふ概念は「信ずる」から分離されて存ぜずして、「知る」は同時に「信ずる」に外ならず、又た「知る」は同時に「成る」である。又た「在る」も「成る」であり、「明らかである」は「存する」である。この同時的連關概念が一方が詮表される時に地方が必ず内在的意味、若しくは裏付けられたる意味として含まれて居なくてはならないのである。

そこで、最初に言つた、「道理へ還元してすべてのものを考へる」ことも、此の意味に於いて行はるゝのである。即ち道理として知らるゝとは「信ぜらるゝ」であり「道理と一つになる」である。

二

佛教は生老病死の苦觀から初まると言はれる。此れは事實であり、所謂諸行無常觀も苦觀と共なることは否定出来ない。然し苦觀は宿命論的厭世觀ではあり得ない。苦觀は「道理」への還元の契機である。

生老病死が取り上げらるゝのは、これが自明の事實であり、いかなる現象よりも切實に迫る事實であり、然も此の事實を最も重大な事實として人間生活は營まれねばならないからである。原始的又は素朴な宿命的厭世觀は、此れを決定的苦として此れに服従しやうとする。それは、此の決定的苦の來らざるを希ひつゝ何等の理性的思考なくして、自然の支配に服するものである。然し、人間の理性が自主性を持つに至るや、此の事實を理解して、此れを支配するか、若しくは此れに對處するか、そのいづれかの仕方に依つて、自然から立ち上ることとなり、此處に始めて人間文化の自主的發展があるのである。

生老病死の四相は人についてであるが、現象一般には生住異滅の四相と言はれる——此の四相に對する人間的理解は二つの仕方で行はれた。

一つは、生老病死等の現象を生起せしめ支配する超人的なものを想定し、此れを最高神として祈りその力に依つて苦を脱せんとし、若しくは太始的な發出原理として、これから現象が生ずることに依つて、生老死等なき狀態を求めんとする、セミチックな宗教は前者に、アリアンの宗教は后者に成立の契機を持つと考へられる。

今一つは、生老病死の事實に於いて、これを一切のものにあるべき道理必然の相と見る。即ちすべてが生老病死すると事實から一切は變易すると言ふ道理を確認し、従つて生老病死あることが當然として、これに對處して生活文化を築かんとする立場である。佛教は此の立場に立つものである。生老病死が道理必然のものだとすれば、此れは苦でも樂でもない筈であり、又た徒らに苦とし又は樂として好惡すべきではない。必然の道理や事實に對して、此れを苦とするは感情であり、人類の始まりから、此れを苦として取扱ふ感情的見方は最も根本的な習性として承け繼がれて

來たが、此れは確かに無始の無明でなくてはならない。道理を知り、道理に即しつゝ、自ら生老病死を現じつゝ行くものに取つては、此の四つの變化相は、永遠なるものゝ不斷の活動である筈である。

諸行無常と言ふ佛教の立言は、一切は無常なるもの、生老病死・生住異滅がすべてのものゝ必然の相であり、是れがあるべき常態だと言ふに外ならない。それは、此れ等の相は我れ等に取つて自明の事實だからである。かくすれば此の變化相を苦として避けやうとする考への方に誤りがある。

佛陀は四諦の說法で「生も苦、老も苦、病も苦至乃人生一切は苦」と考ふることを、佛教的思索の第一條件とした。此れは「苦と悲觀せよ」と教へたのではない。必然の事實が「苦である」と見ることに、「何故に苦となるか」が與えられて居るのである。

實踐的に、「道理必然が苦である」とさるゝ時、既に苦とするものゝ誤りを指摘されて居るのである。道理必然に自らを即せしめ、生老病死等と言はるゝ一切の變化相を道理共に自己の永遠不斷の活動化する爲めに、佛教の一大行道が繰り廣げらるゝのであるが、一言にして言へば、絶えざる道理への思念思慕が、道理を苦として避け様とする心——此れを我執と言ふ——を無くせしめ、反理の努力——我所執——を解消せしめるにある。

此處で、私の述べて居る意途は、道理への一致を目指して居る佛教的生活の仕方である。道理は全を生し、全を一に統攝するものである。道理に一致することは、全に個を投げ入れて、全一活動の個を生かすことである。

かくして佛教の苦觀、無常觀は、「苦と見る」ことを契機として、苦の無實體性を見出すことであり、道理へ思念を向けて道理へ一致することである。かくることが、やがて道理の全一性を感じて個執をすて、全に生きる無我的活動を結果することゝなる。佛教の無我とはかく如きものである。又道理に即することが道理に依つて統攝さるゝ全上に生きることである故に、永遠の道理を生命と感じ、萬有の現象を自體とすることである。かくすれば個体上の生老病死乃至一切の生活行動を含めて、永遠なるもの、無限の活動の相に外ならなくなると言へる。

三

佛教は道理を支配し、或ひは道理を道具として萬有を創造する様な根本原理も若しくは神をも認めない。所謂一神

教的宗教とは全く異なる道理が佛であり、道理に生かさるゝ全體を一に見て佛身(法身)とする。勿論、道理を悟れるものと道理を教ふるものとを共に佛と呼ぶが、此れは「道理を佛とする」ことの中に當然含めらるべきものである。

佛教では、其れ故に、神との約束を破つた意味の罪惡觀は成立せず、道理に暗いことが根本の煩惱と言はれる。所謂無明である。たゞ自らが道理に暗いことが、我々をして道理から離れた感情想念を生ぜしめるのである。

私は此處で 時計の針や面や振子の各々に、自我意識を持たしめて、争はせた寓話を想起する。道理が統率する全一の中で、個が我執に依つて獨立主觀(能取)を持つて、自余を客觀所取化して、自主感の慾いまゝなる意欲の満足を求むる時に、かゝる自主感に結果するものは苦感のみである。寓話と結び合はせて、能取(主觀)所取(客觀)の對立感なきを悟境とする佛教の主張を考慮する時に、此の意味は凡そ明瞭なるものがあると思ふ。

其處で、最初に述べた「道理へ還元してすべてのものを考へ様とする」佛教的性格とは、各目のものが道理に依つて存在することを自覺して、道理に生きること以外ならない。かゝる時に、全一上の個の正しき生き方があり、全一者の不斷の道理的活動として個々の各種の變化相が見られる。

生ける佛陀、即ち釋尊は、丈六の肉體を持ち生老病死の相を自ら取りつゝ、然も「我れ生死を脱し、我れに生死なし。我が身は雜食の身(老病死苦を感じる肉體)にあらず」と言つた。然も是れは、虚言妄想と言ふには余りにも堂々たるその生活であり、眞實言として迫力があつた。蓋し、悟れる釋迦には、既に丈六の肉體は大法界に歸せられ、法界の道理に永遠の生命を感じ、全法界を一大法身として生きて居たが爲めである。「久遠の佛陀」、「法身常住」等の佛教々理の成立する所以でもある。

四

佛教的道德乃至文化等と言はるゝものは勿論佛教自體でもなく佛教から直接産出されたものでもなからう。人は佛教から直接産出されたものを佛教的と言ふとしても、此れを取除いて、佛教が存在することに依つて、佛教的な感化に依り、佛教的な思想の仕方に依つて作り出された道德思想文化を今かく言ふのである。此れ等のものが過去に於いてあつた如くに、或ひはそれ以上に、現に此の國に重大な役割が存する筈である。

私は此處に其の役割を論じ様とするのではない。然し佛教的なものが常に沒理的な教養を飛び越えた知性なき「行

ひ」に取られ易いことに對して、その反對にあることを述べたいのである。

佛教的な考へ方に於いては、常に自我心に苦とか憎惡とかの感情に依つて捉へらるゝもの、即ち心に違逆するものが考へる對象(諸法)として取上げられるのである。この際に、心の違逆のまゝに感情を押し進めることから踏止まつて其の違逆を契機として理性を取戻さんとするのである。其は苦を苦として捉へ「何故に苦か」へ進む仕方である。人は苦を苦とする前にこれを避け様として捉へない。従つて教へるもの立場から「すべてが苦である」と教へて心に觸るゝ限りのものに苦觀を教へるのである。苦を苦として捉へ、憎しみや悲しみをそれとして捉へた時に、道理に違逆した感情が苦感悲觀等を描いて居ることを見出すのである。

「心に違逆して諸法あり、法に隨順して諸法なし」である。道理を見出して、人は直ちに道理に隨順出来ない。生活の實際と長き習性はこれを容易になさしめないからである。佛教に於いても道理は見易く行ひは難しとする。所謂見道とは道理を知ることであるが、眞に道理を知るには長き修道を必要とする。ある道理について其れを知らねばならぬことゝ知つたのが第一轉の知で、知つたと知るのが第二轉の知で、更に進んで道理が自己の生活の光明となつたのが第三轉の知であるとされる。即ち道理を考へ、知つたことを幾度か繰返して眞實に知られたのが此の第三轉の知で、此れは眞實知の意味で智と言はれるものである、所謂「知るは成る」の智である。然し、此れは尙ほ生活全體の智ではなく、或ることの智である。此の智を光明として生活全部が淨化するのが修道で、最も強調さる日々の行道であり、その完成が完成智である。いかなることについて眞實なる智が得らるゝとするが修道の原則である。に修行と共にすべてのものについて眞實なる智が得らるゝとするが修道の原則である。

現在我々の身邊にさし迫つて行的教育とか、行的鍛練とか強調せられ、其れが復古的な空氣を以つて取り上げられて居る。然し、古來の行的訓練は、特に佛教的色彩のものはすべて、今述べたが如き、深き教養の上に出ずるもの知的教養の基礎の上に、むしろその完成の爲めになされたものである。我等は今一度そのことを考ふべきである。

還愚痴と言はれ、一文不知の愚鈍に立ち還つて念佛の一行をなし給ふた法然上人は、最も偉大な教養を超えて來給へると思ふべきであらう。